



## アーバン・パフォーマンス

さまざまな都市でワークショップを行ってきたが、今回はビデオでプレゼンテーションを作りたいと考えた。実質4日間という短い時間でアーバンデザインについて提案を考え、ビデオにまとめるという作業は、参加者のコンピュータスキルにばらつきがあったり、機材が限られていたこともあり結果としてかなりハードなものになったが、こういったワークショップの共同作業にふさわしいひとつのプロトタイプができたという充実感があった。完成したビデオはすぐさまウェブで配信され、ビデオを通してそのアイデアや作業の興奮を誰でも短時間で分かちあえるというメリットを感じている。これは、アーバンデザインがもっと多くの人々の間で話題になり、さまざまなアイデアについて検討され、高い関心の中で新しい社会実験が行われるという環境を実現するための第一歩であり、われわれはこうした形の新しいアーバンデザインと社会との関係のデザインに取り組んでいきたいと考えている。

## Proposal

フィールドワークと地元の参加者との対話から学んだ、ニューキャッスルの課題

- 1) 鉄道による中心市街地と港湾部の分断
- 2) 街のメインストリートであるハンターストリートの平面性
- 3) この街にしかない新しいものへの探求の雰囲気欠如



- 1) 鉄道のターミナル駅を一つ手前のシビック駅に移し路線を短くすることで鉄道敷地を緑道化し、中心市街地と港湾部を連続させる。
- 2) ルーフトップやテラスを利用することでストリートを立体的に活用し、メインストリートの集積効果を高める。
- 3) アップダウンのある地形に合わせた高軌道の新しい乗り物を提案し、街を楽しむためのツールとする。

## Process

スタジオのタイトル「urban performance」の通り、ビデオの素材をつくるために、スタジオのメンバーはまちの中で様々なパフォーマンスを繰り広げた。路上のひさしの上に出て佇んでみる、高軌道の乗り物からの視点の楽しさを確かめるために長い房の先にデジタルカメラを取り付けて通りを走り抜けてみる、はしごを上り下りしながら視点の変化を確かめる。ささやかな体験とその共有を通して、人々の興味をひきつけられるビデオをつくらうとした。手書きのスケッチを撮影し、それを早回しで再生するという技法は、今回の一つの発見であった。特別な技術も必要なく、参加者の思考の軌跡をも想像させる楽しいプレゼンテーションとなったと思う。



この映像は、以下のwebサイトから視聴が可能。  
 ・Responsive Environment webサイト (<http://www.responsiveenvironment.com>)  
 ・YouTube (<http://www.youtube.com>) で "urban performance @ Newcastle" を検索  
 member: 山代悟, 西澤高男, 日高仁, Chloe Goldsmith, Chloe Beever, Reichil Cheetham, Sean Lacy, Christine Pizzuti

urban performance @ Newcastle  
 Responsive Environment Studio